蜀狗（すう）

富岡多恵子

芻狗

富岡多恵子

講談社

芻狗（すうく）

昭和五十五年九月十日　第一刷発行
昭和五十五年十一月二十五日　第二刷発行

著者——富岡多恵子

© Taeko Tomioka 1980, Printed in Japan

発行者——野間省一
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番二一号　郵便番号一一二　電話東京〇三(九四五)一一一一(大代表)　振替東京八—三九三〇
印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——株式会社堅省堂
定価——一一〇〇円
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0093-168760-2253（0）　（文1）

目次

坂の上の闇 5
猟狗 43
結婚 91
箱根 131
環の世界 169
初出一覧 218

装幀　辻村益朗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

芻狗（すうく）

坂の上の闇

伊勢古市の、間の山と呼ばれる尾部坂をのぼりきった長峯丘陵の最高所に、妓楼油屋があった。敷地三千坪とかいわれた広大な土地に割って入るように、現在は電車が走っている。

夜の十一時ごろ、福間一紀なる男が油屋の客となった。寛政八年の五月四日のことである。その夜は、節句の宵宮で長峯二十余町に並ぶ妓楼はどこもにぎわっていた。当時は妓楼が七十軒くらい軒をつらね、古市遊廓最盛期であった。油屋に入ってきた男は、年のころ、二十七、八歳の総髪で、色白の美男子であった。男は、ひとりで油屋に入ってきた。

男を仲居の万乃が部屋へ案内した。万乃は商売柄、とりとめないことを愛想よく喋りつづけていた。万乃のさえずりは、あちこちから聞こえてくる伊勢音頭にまじって、一紀に

はよく耳に入らなかった。部屋に入ってしばらくひとりで酒を飲んでいると、おこんがきた。敵娼(あいかた)におこんをあてがったのは万乃であった。年は十五だといった。一紀は黙って酒を飲みつづけた。おこんも黙っていた。時折、万乃が客を案内する声が部屋の外で聞えた。その喋り方、声の出し方、笑い方は、いかにも客あしらいにもの慣れた、その場限りの軽々しいものに思えた。他人に喋っている様子を聞くと、一紀にはことさらにそれがよく感じられた。

この伊勢の者かと一紀はおこんにたずねた。おこんは黙っていた。敵娼に身の上をきく野暮に、一紀は無頓着であった。自分は宇治の者だと一紀はいい、陰気に酒を飲んだ。一紀は、そのころ一日に五千人といわれた伊勢まいりのヨソ者、旅人客でないことをいいたかった。おこんには、陰気な客の気分を逆転させる手管がまだなかった。ただ田舎くさい様子で坐っていた。その様子が、一紀に、どこの在所の娘かと思わせ、くにをたずねさせたのだった。酒をつぐのに伸ばすおこんの手が一紀の目に入った。ふとい、色のくろい二の腕が出てきた。京都ではこういう田舎くさい女を見たことはなかった。京都を知っているかと一紀はいった。おこんが知るはずはなかった。自分は京都にいたんだ、と一紀はいった。おこんはあまり驚かなかった。一紀は、三年間の京都留学ののち、一年ほど前から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

宇治浦田町に於て開業している医者であった。しかし、さすがにそこまでは女に喋らなかった。ただ、おこんが、京都にいたという一紀に、どうして京都に、とたずねたら答えたかもしれなかった。その時、つるつるすべるような声をあげて、万乃がふすま越しに、おこんをちょっとの間借りますといって呼びにきた。一紀はひとりになった。

ひとりで酒を飲んでいると、一紀にはまわりの音や声が急によく聞えるように思えた。とりわけ、つい先ほど二階に三、四人であがっていったらしい客の声が手にとるように一紀には聞える。どうやら油屋の上客らしく、その席にいる女たちの声も数人らしく聞きとれる。男たちの笑い声がふいに爆発のように響き、女たちの笑い声もそれを追いかけている。笑い声にまじって喋る男の野太い声も聞える。役者の声色らしいのも聞える。長峯には芝居小屋がある。その帰りかもしれない。しかしその喋る言葉の調子はこの土地の者ではない。伊勢まいりの帰りの地方の客か、一年に一度ここにくる商人だろう。油屋には、一紀のような地元の客があがる方がめずらしい。古市間(あい)の山は、伊勢まいりの精進落しの場所である。ひとりで陰気に酒を飲む客などこの夜も一紀の他にはいない。陽気に、派手に遊んで、金を落す客がこういう場所の上客だ。

かなりの間、一紀はひとりで酒を飲んでいたが、おこんは戻ってこなかった。二階で派

手にやっている客の方へまわっているらしいことは想像がつく。ところが、その二階の客のにぎわいがもはやおさまってもおこんは戻らない。といって、一紀は、どうしてもおこんでなければならぬとせつに思って酒を飲んでいるわけではなかった。今ここにだれか酒の相手に女がおればいいのである。一紀とて、妓楼の、まわしという商法を知らぬわけではない。

おこんが部屋から出ていって一時間くらい一紀はひとりでいた。その間に、下女が二度酒を運んできていた。ちょうど、その酒がきれたところで、一紀は立ち上った。

部屋を出てきた一紀を、万乃が目ざとく見つけ、ひきとめるやら、謝るやら、かしましく言葉を一紀にあびせた。その言葉に反応せぬ一紀に向って、今度は、いかにも野暮天といわぬばかりに万乃は陽気にまくしたててきた。一紀は、きた時にあずけた刀を万乃から受けとった。刀を渡す時、万乃は、小さい目を見開いて、一紀をにらむように見た。その目付きには、女を待ちくたぶれて帰る男をちょっとからかうような、またなぐさめるような、一種の親愛のごとき色あいも見えたが、一紀にはそれが感じとれなかった。万乃は、女郎を采配する仲居頭らしいしっかり者で、いかにもこういう商売の水を飲んできた女の、薄情そうな風情と、ひとなつっこさが、裏腹にその痩せぎすの身のこなしにあらわれ

ていた。刀を、一紀の掌に、子供に念を押してものを渡すよう万乃は押しつけた。そして、心もち口をまげ笑みをこらえ、顎を引き、首をかしげて一紀を見た。その、万乃の様子に反応するように、一紀も真面目な顔付きで刀の鞘を左手でつかんだ。そしてふいに、右手でものものしく刀を半分抜き、万乃の方を見た。万乃は、子供のいたずらを見た時のように、わざと目を見はり口を開けて驚いた様子をした。一紀も、万乃に、いたずらをわざと見せるような様子であった。一紀は万乃の顔を見ながら、半分引き抜いた刀を、すうっと先の方まで抜いていった。刀をこうして引き抜くなんてことは、一紀に今までなかった。引き抜いた刀をだらりと床に向けて、一紀はもう一度万乃の顔を見た。万乃は、不思議なものを見るように刀を見、それから一紀の顔を見上げて、機嫌をとるようにかすかに笑った。

その時、一紀はふいに刀を振り上げ、万乃の横で刀をかまえて見せた。それは子供がおもちゃの刀をかまえて見せているようだった。一紀はふざけて万乃を威赫しているように見えた。万乃はアレアレ、マア、と子供をはやしたて、またいたずらをとどめるような声をあげた。一紀はかまえた刀をもう一度振りあげ、振りおろした。それが、アレアレ、といいながら手をあげて、一紀の遊びをとめようとしている万乃の手に触れ、指三本を斬っ

た。万乃は、助けて！　人殺し！　と異様に高い声をはりあげ、奥の方へかけこんでいった。人殺し！　人殺し！　という万乃の声が何度も何度も響いた。その、人殺しという声に誘われるように、一紀は奥へ入っていった。

万乃の声に驚いて下男の卯吉が奥からかけ出してきた。その卯吉を一紀ははらいのけるようにして、腕を斬った。次に下女のよしが出てきたが、出合頭に左の肩先と左手指を斬られて倒れた。家の中が揺れるようにざわめきはじめた。一紀は、さらに奥へ踏みこんでいき、油屋の家族のいる部屋のふすまを蹴った。そこには、油屋主人清右衛門の母親きさがおびえて坐っていた。一紀はきさの頭めがけて斬りおろしたが、きさが転倒したので肩をかすめた。さらにもう一度肩から腕を斬り、倒れたきさを踏みつけて、乳の下をえぐるように斬った。きさはそれで死んだ。

一紀はふすまを開けとなりの部屋を見た。そこにはだれもいなかった。じつはそこに清右衛門の女房が病気のため寝ていたのであったが、一紀には蒲団の中の人間が目に入らなかった。表の方では、ひとびとの叫び声、わめき声がしていた。あちこちの部屋から女や客も出てきていた。一紀は血にまみれた刀をもち、ひとの声のする表の方へ引返していった。その時途中の急な階段から、階下の叫びを聞いて女郎のきしがころげるように降りて

きた。一紀は階段の横から待ちぶせるようにしてそのきしの首めがけて刀を思い切り振りおろした。首は半分落ちかかるくらいに斬られ、きしは即死した。そのあとから、女郎のしかが降りてきたが、頭と肩を斬られて倒れた。二階からは、女たちのあとからつづいて男三人が重なるように降りてきた。最初の男は右腕と尻に深い刀疵を受けて倒れ、次の男は顔と背中、三人目は左手首を斬り落されて、いずれも重傷を負うて倒れた。

倒れた人間を足で払いのけるようにして一紀が表口の方まできてみると、そこにはだれもいなかった。階段下で、一瞬のうちに人が斬られる様を見て、部屋から飛び出してきた者はどこかに逃げたのだった。

当時の油屋は、女郎三十八人、料理人三人、下女二人、下男三人、子飼十二人、主人夫婦、主人の母親、の六十一人の大家族で、妓楼としては全盛の時であった。事件の当日、主人清右衛門は、親戚の不幸のため外出して難をまぬがれたが、それにしても六十人もいる人間のほとんどがどこへ逃げたのかいないのだった。おこんに「まわし」をさせるほど客が多かったはずなのに、その多くの客は、斬られた三人の他はどこへ消えうせたのか、とにかく、一紀が表にまで出てきた時、そこにはだれもいなかった。少くとも一紀にはひとの気配は感じられなかった。

一紀が、返り血でぬれた姿で立っているところは、つい先程万乃から刀を受けとっていた場所であった。万乃には、羽織もあずけてあった。しかし、さすがに、その時の一紀は羽織のことは忘れていた。右手の刀が重くなり、それを見ると血がついていた。その刀を、重いものをぶらさげるようにもって外へ出た。そのあとはわからなかった。

暗闇の中を、一紀は歩いていた。どこかで刀が手から離れ、すでに手ぶらであった。どこを、どっちの方角へ歩いているのか不明であった。ただ、自分が暗闇の中を歩いているのは、つい先程ひとが殺されたからだということはわかっていた。それは自分とはかかわりない事柄に感じられた。それより、なぜこうも急いで、暗闇を歩いているかの方が、不思議に思えるのだった。あそこへいって、ただ、少々酒をくらっただけではなかったか。満足のいくほども飲んでいないではないか。酒も思ったほど飲まず、女も抱かずに、いったいあそこへなにをしにいったのか。一紀は、思い出したようにしばらく走り、また歩く。夜の山道は、圧縮された闇の間を押し割っていくように一紀に感じられた。

古市間(あい)の山から南へ山を越え、さらにやや東へ、三里余の道を一紀は歩き、松尾村畑茶屋の生家に明け方たどりついた。生家で家を継ぎ百姓をしているのは弟の与三右衛門であった。十数年ぶりに会う兄の異様な風体に驚きいる与三右衛門に、一紀は油屋での出来事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.